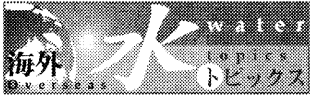


2006年(平成18年)9月14日(木曜日)



●井戸水で国が減じる？ 深刻なヒ素汚染に直面する バングラデシュ

1971年パキスタンから独立したバングラデシュ、現在、国民(1億4千万人)の約25%がヒ素に由来する病気に罹っており、ヒ素中毒の患者数も毎年8%増加するとの推計もある。このまま放置すると国家存亡の危機に…。

独立前の国民の大多数は、洪水の危険性が高い低湿地にすんでおり、衛生状態はきわめて悪かった。このため、水を媒介として、コレラや赤痢などの流行がたびたび発生し多くの命が奪われた。こうした状況を改善するため、バングラデシュ政府や国際機関が衛生

状態の改善を独立後から積極的に進めてきた。特に飲料水の衛生状態改善のため、井戸の整備を積極的に進め、この政策は大きな成果を上げた。

なぜ井戸が必要だったのか。バングラデシュは大きな河川、例えばガンジス川やメグナ川に囲まれているが、この地域は雨期と乾期がはっきり分かれており、乾期には農業用水をはじめ、飲料水の確保が出来なかった。そして井戸は全国に普及し、多くの国民は「安全な水の恩恵」を受けたかに見えた。しかし問題は90年代前半に顕在化した。

住民の皮膚にヒ素中毒特有の黒い斑点が見いだされるようになり、政府は国際機関の助けを得て、水質調査をしたところ、多くの井戸が元来地層中に存在したヒ素に高濃度に汚染されて

いたのだ。全国64県の内、59県は“重汚染地区”と認定された。

ダッカに近いコイラ村では3500本の井戸中500本で高濃度のヒ素が検出された。平均で100ppbの濃度で、これはWHOの水質基準(10ppb)の10倍である。昨年、ダッカの市民病院で6万人の患者を対象にヒ素中毒の病状を調べた所、1万500人にその症状が発見された。

井戸水によるヒ素中毒を防ごうと、政府や世界銀行、UNICEF等がプロジェクトを組んでいるが、遅々として進んでいない。井戸水の代わりに表流水を沸騰させて飲むように指導しているが、炊事にさえ、不足している貴重な薪を「水の沸騰に使う」人はほとんどいない。

(Y)